

共に育てた花

感王寺 美智子 福岡県朝倉市 六十歳

震災後、気仙沼の仮設住宅で暮らしていた「仮設住宅っていうと、辛いだろう？とか寒いだろう？なんてばっか言われっぺ。けど、おら達は、みんなして、花さ植えたり、歌さ歌ったり、楽しい思い出さ、いっぺえ作るべ」自治会長さんは、そう言った。グラウンドの角に、小さな畑を作り野菜を育てた。窓の下に、季節の花を咲かせた。収穫した野菜で作って食べた、カレーライスの美味しかったこと。花に埋もれた仮設住宅は、通る人達が立ち止まる程だった。力を合わせ一緒に生きる日々は、互いの傷ついた心を支え合い、生きる力を養ってくれた。やがて災害公営住宅も建ち始め、一人また一人と、新しい住まいへ引っ越していった「みんな、それぞれの場所で、また花さ、咲かせるべ」手には、共に育てた球根や種が、大切に握られていた「震災から十年目、ここさ、また集まるべ」そう約束して。私は九州に越した。小さなベランダに咲いた向日葵に、みんなの顔が浮かぶ。ー来年は会えるーそう思っていたがコロナ禍。行くに行けない悲しみに涙ぐむ。そんな時、電話が鳴った「大雨、大丈夫か？」自治会長さんだ。大丈夫と言って切ると、また鳴る。また切る、また鳴る。遠い九州の部屋が、みんなが顔を覗かせる、あの小さな仮設の部屋に戻ったように感じた。そうだ、私達は約束したんだ。どこへ行くこうとも、そこでまた花を咲かせ、笑顔の花を繋いでいくと。あの仮設住宅で、共に生きた日々を忘れない。